

雨中嵐山の周恩来

——王敏教授「周恩来の対日『民間外交』の原点を探る」に触発されて

弁護士
内田 雅敏



王敏法政大学国際日本研究所教授から「周恩来の対日『民間外交』の原点を探る 百年前の『雨中嵐山』を読む」（法政大学国際日本研究所研究成果報告集『国際日本学』第17号収録）をいただいた。

3月25日から3日間ほど沖縄辺野古米軍新基地建設反対運動に参加し、「海を殺すな！」とキャンペーンシュワブ前に座り込み、機動隊にごぼう抜きされて排除されながら、糞、舜、禹の昔から治世とは治水、すなわち政治の要諦は民の暮らしを守る処にあったはずだ、

などと考えていたので、大変興味深かった。コロナウイルスのまん延により明日にでも緊急事態宣言が出されるかもしれないとうわさされていた中で、まさに「雨中嵐山」詩に云う「一線陽光穿雲出」（陽の光雲間より射して）のような読後感であった。

1919年4月5日、雨の嵐山

1919年春、日本留学に見切りをつけた若き周恩来は、帰国前約1カ月、京都の友人宅に滞在した。4月5日、周恩来は、京都西

北の嵯峨野、嵐山を逍遙し、二篇の詩を詠んだ。「雨中嵐山」と「雨後嵐山」である。

「雨中嵐山」

雨中二次遊嵐山（雨の中を二度嵐山に遊ぶ）

兩岸蒼末、夾着幾株桜（兩岸の青き松に、いく株かの桜まじる）

至尽処突見一山高（道の尽きるやひときわ高き山見ゆ）
流出泉水緑如許、繞石照人（流れ出る泉は緑に映え、石をめぐりて人を照らす）

瀟瀟雨、霧蒙濃（雨濛々として霧深く）

一線陽光穿雲出、愈見姣妍（陽の光雲間より射して、いよいよなまめかし）

人間的万象真理 愈求愈模糊（世のもろもろの真理は、求めるほどに模糊とするも）
一模糊中偶然見着一点光明、真愈覺姣妍（一模糊の中にとたまさかに一点の光明見出せば、真にいよいよなまめかし）

「雨後嵐山」

山中雨過雲愈暗（山あいの雨が通り過ぎると、雲がますます暗くなり）
漸近黄昏（ようやく黄昏が近づく）

万緑中拥出一叢櫻（万緑に抱かれた一群の桜は）
淡紅嬌嫩、惹得人心醉（うつすらと赤くしなやかで、人の心を酔わせるほどに惹きつけらる）

自然美、不假人工 不受人拘束（人為も借りず、人の束縛も受けない。自然の美しさ考えれば）

想起那宗教、礼法、旧文艺、、、
粉飾的東西（あの宗教、礼法、旧文艺、、、粉飾物が）

還在那講什么信仰、情感、美観、、、
的制人学説（信仰とか、情感とか美観とかを説く、人々を支配する学説に今なお存在する）

登高遠望 青山渺渺 被遮掩的
白雲如帶（高きに登り遠くを望めば、青山は限りなく広く、覆い被された白雲は帯の

ようだ

十数電光、射出那渺茫嫩嫩黑暗的城市（あまりの稲妻がほんやり暗くなった都市に光を刺す）

此刻島民心理、彷彿從情景中呼出（この時、島民の胸中が、あたかも情景より呼び出されるようだ）

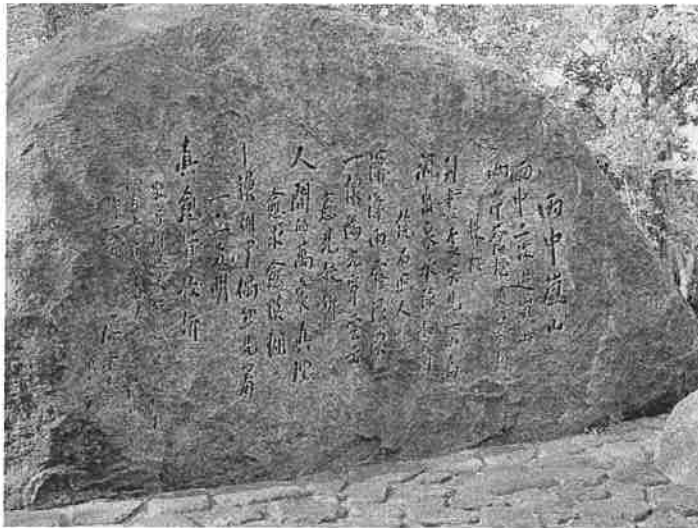
元老、軍閥、党閥、資本家、、、

（元老、軍閥、党閥、資本家、、、は）

從此後 將何所持（今より後、何をあてにしようとするのか）

（蔡子民訳）

1989年、日中友好を願う人々によつて大堰川（保津川。渡月橋から下流は桂川となる）の東側、嵐山亀山公園の一角



→ 周恩来詩碑。

に、周恩来記念詩碑が建立され、「雨中嵐山」の詩が刻まれた。私は、この碑の前で日中共同声明全文を暗唱したことがある。

王敏教授は、前記二篇の詩を読み解くことで、周恩来と嵐山との一体感が浮かび上がると言い、次のように書く。

『雨中嵐山』が読者に想像させるのは、雨に浮かぶ水墨画に似た風景であり、川面がなんとも幽玄で広々と浮かび上がり、流れ出る泉の水は緑

のごとく、河畔の山岳がすつくと立っている。これこそ景色が突然切り替わった瞬間となる。そもそも、霧雨の朦朧（もうろう）とした中で、一筋の光が漏れてきたのである。それは自然よりの論の如く、周恩来が万物真理とは求めるほど感じ捉えられるものだと思えるのである」

三・一独立運動から五・四運動へ

周恩来が嵯峨野、嵐山を逍遙した約1カ月前の3月1日、日本の植民地下にあった韓国で、「三・一独立運動」が起きた。

第1次世界大戦後、ウイルソン米大統領領らが提唱した「民族自決」の聲の高まりの中、1919年3月1日、日本の植民地下にあった韓国ソウルのタブコル公園で、学生たちが、33人の民族代表が起草した独立宣言を読み上げ、デモ行進をした。三・一独立宣言は、その末尾近くで、以下のように日本人にも呼びかけた。

「今日吾人ノ朝鮮獨立ハ朝鮮人ヲシテ正當ナル正策ヲ遂ケシムルト同時ニ日本ヲシテ邪路ヨリ出テ

テ東洋ノ支持者タル重責ヲ全フセントシ」

（今日われわれが朝鮮独立を図るのは、朝鮮人に対しては、民族の正当なる生榮を獲得させるものであると同時に、日本に対しては、邪悪なる路より出でて、東洋の支持者たる重責を全うさせるものである）

これは、1924年12月28日、中国の孫文が神戸高等女学院で行なつた演説——日本は「西洋覇道の番犬となるか、それとも東洋王道の干城となるか」——にもつながらる。しかし、日本の対韓政策は、

「わが日本の国土はアジアの周辺にありといえども、その国民の精神は、すでにアジアの固陋を脱して西洋の文明に移りたり。しかるにここに不幸なるは近隣に国あり、一を支那といい、一を朝鮮という。（略）」

今の支那朝鮮はわが日本国のために一毫の援助とならざるのみならず、西洋文明人の眼をもつてすれば、三国の地相接するがために、時にあるいはこれを同一視し、支韓を評するの価をもつて、

わが日本に命ずるの意味なきにあらず。（略）今日の謀をなすに、わが国は隣国の開明を待つて共にアジアを興すの猶予あるべからず、寧ろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて、特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接する風に從つて処分す可きのみ。悪友を親しむ者は共に悪友を免がる可からず。我は心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」（福沢諭吉「脱亜論」1885年）を基調とするものであった。

三・一独立運動は、日本の官憲の弾圧にさらされ、韓国側の調査によれば、死者7500余名。被逮捕者4万6000余人を数えるといわれるが、同年4月、上海での大韓民国臨時政府樹立につながり、さらに同年5月4日、帝国主義に反対する北京の学生デモ、「五四運動」へと波及した。

1915年に対華21カ条要求を行なつた日本を含め、列強に蚕食される祖国のありように危機感、焦燥感に駆られたであろうである

う若き周恩来は、帰国するや「五四」運動に参加し、天津の南開大学に入学した。翌20年、フランスに留学し、24年に帰国した。以降、政治活動に挺身することになる。革命家周恩来の誕生である。

治水帝禹から角倉了以へ

「雨中嵐山」、「雨後嵐山」の二篇を読み込んだ王敏教授は、周恩来の歩んだ道をたどる。

嵐電（現・京副電鉄）の嵐山駅から渡月橋へ向かい、橋を渡つて、大堰川（保津川）の西岸を北に向かつて歩き大悲閣千光寺の参道である石段に達した。

「至尽処突見一高山」（道の尽きるやひとときわ高き山見ゆ）である



→角倉了以（すみのくらしりょうい）像。

る。約200段ある石段を上ると、そこが千光寺だ。石段を登りながら右下、大堰川を眺めると、流出泉水緑如許、繞石照人」（流れ出る泉は緑に映え、石をめぐりて人を照らす）、山峡、岩を噛みながら流れる水を兩岸の樹々が緑に染める。時折、保津川下りの船が揺られながらゆっくり流れてゆく。水に潜つた水鳥が思わぬ遠い川面から顔を出す。

千光寺は、大堰川を開削した角倉了以ゆかりの寺だ。角倉了以（1554～1614）は、秀吉、徳川初期、朱印状による海外貿易で財を成し、また大堰川開削をはじめ富士川、高瀬川の開削、途中で終わったが天竜川などの開削工事を行なつた。

作家の辻邦生は、『嵯峨野明月記』で、本阿弥光悦、俵屋宗達、角倉了以の3人を主人公とし、戦国の世にあつて美を追求する物語を紡ぎだした。王敏教授が言及する雅な意匠を施した「嵯峨本」のことも、この本で知った。

周恩来記念詩碑近くに開削

の象徴であるつるはしを手にした角倉了以の立像がある。立像は、開削した大堰川を見ている。彼の墓が大悲閣千光寺にあったことは知らなかった（災害後、近くの二尊院に移設）。晩年の彼は、千光寺で大堰川を眺めながら修行し、開削工事で亡くなった人々の魂の安息を祈ったという。いい話だ。

千光寺にはやはり、つるはしを手にした角倉了以の木造の座像が安置されている。王敏教授は、角倉了以を中国の古代夏王朝（伝説とされてきたが、近年、その実在が確認された）の治水帝禹の系列に位置付け、千光寺参道入り口に隠元禅師の弟子高泉性激の詩「登千光寺」が刻まれた石碑があり、詩の後段に「何人治水功如禹 古碣高鏤了以翁」（何人の治水、功は禹の如くたらんや 古碣は高らかに鏤ほるる了以翁）と、角倉了以を治水帝禹になぞらえてその功績をたたえていると解説する。

琵琶湖疎水

王敏教授は、1971年1月29日、周恩来が北京の人民大会堂で

日本卓球協会の後藤会長一行と会見した際に、「私は帰国前に京都に1カ月ほど逗留（とまりゆう）しました。船に乗り、洞窟を通り抜け琵琶湖に行きました。琵琶湖は大変美しいですね」と語ったことについて、この洞窟とは南禅寺の境内を通る琵琶湖疎水の水路上のトンネルに違いないとして、若

き周恩来が南禅寺にも足を運び、完成してそれほど経ていない疎水のトンネルをくぐったことに言及している。

そして、周恩来が疎水↓疎通、その延長上に「民間交流」を発想したと書き、治水帝禹↓角倉了以↓周恩来と位置付ける。やや強引という感もなきにしもあらずだが、冒頭、沖繩辺野古の座り込みの中で考えたように、政治とは治世、治水、すなわち民の暮らしを守ることを要諦とするという考えからすれば、治水帝禹↓角倉了以↓周恩来という位置付も分からなくはない。アフガニスタンで灌漑（かんがい）事業にまい進し、先ごろ狙撃されて遭難死した故中村哲医師も、この流れの中に位置付

けられるべき人であろう。まさに「歴史とは現在と過去との間における尽きることもない対話である」（E・Hカー）。

民間交流から日中共同声明

王敏教授の周恩来「民間交流」論は、1972年9月25日、日中国交正常化のために北京に飛んだ田中角栄首相が周恩来総理に会って最初に発した言葉が、「私は、長い民間交流のレールの上に乗って、今日ようやくここに來ることのできました」であったということとを思い出させた。

「民間交流のレールに乗って」、いい言葉だ。国同士はどうであれ、馬鹿な政治家、学者、メディアが偏狭なナショナリズムをあおらない限り、民間は決して争いを望まない。

王敏教授は、周恩来が気配りの人であったとし、その一例として、日中国交正常化交渉の際、中国政府主催の宴で田中首相の郷里新潟県の民謡「佐渡おけさ」を演奏させ、田中角栄をいたく喜ばせたというエピソード紹介している。

確かに、周恩来のこのような心遣いは二クイ。田中首相に同行した大平外相のために彼の郷里の「金毘羅船々」を、同じく二階堂官房長官のために「鹿兒島おはら節」を演奏させた。

このような心遣いは、周恩来の人柄であると同時に、1936年12月の西安事件に際し、蒋介石を説得し、抗日統一戦線結成への道筋をつけたこと、さらに、翌年7月7日、盧溝橋事件を契機として日本軍の中国侵略が本格化する中で、同年9月、抗日のための第二次国共合作が成立して以降、延安（中国共産党の根拠地）から武漢、重慶に派遣され、国民党の蒋介石とともに抗日を指導し、他方で、抗日首都重慶の「周公館」を拠点として、「第18集團軍（八路軍）新4軍重慶駐在代表」という公式な、「中国共産党機関紙「新華日報」主筆（重慶にて発行）」という公然な、そして「中国共産党中央南方局書記」という非公然な、三つの顔をたくみに演じ分けるやもしれない国民党との暗闘と

いう厳しい局面を乗り切ってきた革命家周恩来の身に着けた才覚でもあろう。

日本海軍航空隊による重慶無差別爆撃を鋭く告発した前田哲男さんの名著『戦略爆撃の思想』（朝日新聞社）は、蒋介石と周恩来との関係についても触れており興味深い。

西安事件に際して、張学良の要請で蒋介石説得のために西安に飛んだ周恩来は、蒋介石に「校長」と呼びかけ、抗日統一戦線結成を説いたという。第一次国共合作下、孫文の肝いりで広州に作られた黄埔軍官学校で蒋介石が校長、周恩来は政治部副主任であった。

1972年、中ソ対立が高まる中、ニクソン米大統領を電撃訪中させ、米中国交正常化を企図し（ただし、ウォーターゲート事件でとん挫）、他方、日中国交正常化のために戦争賠償の放棄など大幅に譲歩した大胆な政策も、重慶での抗日国共合作の中で培われたリアリズムであろう。

そんな周恩来も、前記晩餐会での田中首相のあいさつ中にあつた

「中国国民に多大のご迷惑をおかけしたことについて、私はあらためて深い反省の念を表明するものであります」という、いわゆる「ご迷惑」スピーチについては、翌日の会議の冒頭で、田中首相に対して「中国国民が受けた被害は『ご迷惑』といった程度のもものではな

い」と厳しく批判した。

中国国民は、「中華人民共和国政府は、中日両国国民の友好のために日本国に対する戦争賠償の請求を放棄することを宣言する」（日中共同声明第5項）に不満であつた。1894年日清戦争以降の日中関係を考えれば当然である。周恩来は、この不満を「われわれは日本の民衆と戦争をしていたのではない。日本の軍国主義者と戦争をしていたのだ。日本の民衆も軍国主義の被害者だ」として、いわゆる「二分論」を展開し、抑え込んだ。しかし、この「二分論」には無理があつた。前記戦争賠償の放棄は日中共同声明前文中の「日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛

感じ、深く反省する」を受けてのものであるが、問題なのは、われわれ日本国民がこのことをどの程度まで自覚していたかである。

9月29日、日中共同声明をまとめて北京を発つ田中首相を見送りにきた周恩来が、「私たちと日本の付き合いは二千年もの歴史と半世紀の対立があります。今日、私たちは時代がらせん状に前進するのを見ました」と述べたというのもいい。

まさに日中共同声明前文にいう「日中両国は、一衣帯水の間にある隣国であり、長い伝統的友好の歴史を有する。両国国民は、両国間にこれまで存在していた不正常的な状態に終止符を打つことを切望している。戦争状態の終結と日中国交の正常化という両国国民の願望の実現は両国関係の歴史に新たな1ページを開くことになるう」である。

日中国交正常化から3年余、1976年1月8日、周恩来は亡くなった。

周恩来は、日本の敗戦後、国共内戦を経て1949年10月1日の

中華人民共和国成立以降、毛沢東の片腕として国務を担うかたわら、米ソの冷戦が進行する中、インドのネール首相などと共同し、アジア、アフリカの非同盟諸国を糾合し、55年、ジャワのバンドンでアジア・アフリカ会議を開き、領土・主権の相互尊重、相互内政不干涉、平等互恵、平和共存の平和五原則を提唱した。

この平和五原則は、1972年の日中共同声明の第6項「日本国政府及び中華人民共和国は、主権及び領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政に対する相互不干涉、平等及び互恵並びに平和共存の諸原則の基礎の上に両国間に恒久的な平和友好関係を確立することに合意する。両政府は右の諸原則及び国際連合憲章の原則に基づき、日本及び中国が相互の関係において、すべての紛争を平和的手段によつて解決し、武力、または武力の威嚇に訴えないことを確認する」として引き継がれた。

文革と周恩来

そんな立派な周恩来だが、不可

解なところもある。彼はなぜ、毛沢東の暴走、とりわけ1967年ごろから始まり、70年代半ばまで続き、中国社会をガタガタにした「文化大革命」を止められなかったのか。

72年9月29日、田中首相らは、

北京から直接帰国したのではなかった。周恩来が同行した上で上海に寄り、実力者の張春橋・上海市革命委员会主任に会い、上海市革命委員会主催の歓迎会に出席し、翌30日に帰国している。この年の2月21日、ニクソン米大統領の訪中があった（前年7月、明年5月までに訪中するという電撃的な発表がなされ、世界を震撼させていた）。ニクソン大統領領らも、北京から直接ワシントンでなく、上海に立ち寄り、2月27日、米中共同声明（上海コミュニケ）を発表し、帰国している。これは偶然ではない。当時は文革の最中。周恩来は、上海グループとも称された前記の張春橋政治局常務委員兼副首相、江青毛沢東夫人、王洪文党副主席、姚文元政治局委員ら、「四人組」の牙城である上海に二

クソン大統領や田中角栄首相を立ち寄せ、「四人組」の顔を立て、中・米、中・日の国交正常化について彼らの同意を取っておく必要があったのである。四人組の失脚は76年9月9日の毛沢東の死まで待たねばならなかった。

言必信 行必果

周恩来は数々の名言を残している。有名なのは「前事不忘、後事之師」（前のこと忘れず、後のことの師となす）であるが、私は「言必信 行必果」（約束したことは守らなければならない。行なったことは結果を出さなければならない）が好きだ。この点に関連して思うことがある。それは日中共同声明第7項「日中両国間の国交正常化は第三国に対するものではない。両国のいづれもアジア太平洋地域で覇権を求めべきでなく、このような覇権を確立しようとする他のいかなる国、あるいは国の集団による試みにも反対する」という反覇権条項である。

この反覇権条項は、中ソ対立の中でソ連を意識した中国側が求め

たものであった。米中共同声明（上海コミュニケ）でも、中国側は「すべての国は、大小を問わず平等であるべきであり、大国は小国を愚弄すべきではなく、強国は弱国を愚弄すべきではない。中国は決して超大国にはならず、またいかなる覇権主義及び強権政治にも反対する」と述べている。

日中共同声明から6年後、78年の日中平和友好条約の締結時も、この反覇権条項が問題となった。鄧小平と園田外相がやり合った。ソ連を刺激したくない日本側は、この反覇権条項を入れることに慎重だった。そんな日本に対して鄧小平は、創価学会の池田大作を通じて、この反覇権条項は将来、中国が覇権国家とならないようにするために必要なのだ、と日本側を説得したという。すでに74年4月10日、鄧小平は国連総会において以下のように演説している。

「中国政府は、今回の総会が、発展途上国の団結を強め、民衆の経済的権益を守るうえで、また帝国主義、とりわけ覇権主義に反対する各国人民の闘争を促進するう

えで、積極的に寄与するよう期待している。（略）もし中国が変色し、超大国になり、世界で覇を唱え、いたるところで他国をあなどり、侵略し、搾取するようなことになれば、世界人民は、中国に社会帝国主義のレッテルをはるべきであり、それを暴露し、それに反対すべきであり、また中国人民とともにこれを打倒すべきである」

それから約半世紀、今や中国は、人権弁護士らの拘束など、人権弾圧国家となっており、かつての友党・日本共産党からも覇権国家と批判されている。習近平主席は周恩来の名言「言必信」、そして鄧小平が国連総会で切ったタンカ（演説を思い起こすべきである。2020年4月5日（75歳の誕生日）に、101年前の若き周恩来に思いをはせながら。

■うちだ・まさとし 1945年生まれ。68年早稲田大学法学部卒業。著書に「平和資源」としての日中共同声明（スペースス伽耶、2017年）など多数。